8/31　2006

Japanese Music Education Society　**News Letter**

第 25 号　No.25

# 日本音楽教育学会ニュースレター

目　　次

１．ご挨拶
韓国音楽教育学会会長　権　徳遠 -------- 2

２．報告・お知らせ
２－１　平成 18 年度第２回常任理事会報告 ---------- 3
２－２　平成 18 年度第２回編集委員会報告および
『音楽教育実践ジャーナル』Vol.4 no.2（通巻８号）特集・原稿募集 --- 6
２－３　音楽文献目録委員会　新刊のお知らせ ---------- 8

３．大会のご案内・報告（日本音楽教育学会関係）
平成 18 年度全国大会（千葉大学）のご案内 ---------- 9

４．海外トピックス
ISME 第 27 回世界大会（マレーシア大会）報告 ---------- 13

５．国内トピックス
第３回　夏期ワークショップ　報告 ---------- 15

６．事務局からのお知らせ ---------- 17

編集後記 ---------- 18

# 1.　ご挨拶

韓国音楽教育学会会長　権　徳遠

韓国音楽教育学会会長 Doug-won Kwon

（日本音楽教育学会と姉妹学会協定を結んでおります韓国音楽教育学会では，Byoung-Hoon Whang 会長が任期を終えられ，新たに Doug-won Kwon 氏が会長に就任されました。以下の原文は英語，訳文は村尾。）

日本音楽教育学会の皆様こんにちは。この度韓国音楽教育学会の会長に就任いたしました Dou-won Kwon です。日本音楽教育学会のニュースレターにてご挨拶できる機会を与えられまして大変光栄に思っております。先ずは，韓国音楽教育学会(Korean Music Educators Society)を代表いたしましてお礼申し上げます。

さて，日本の音楽教育は長い年月をかけて目覚ましい発展してきました。その発展の様子はいろいろなところでよく聞いております。また，日本音楽教育学会の皆様が日本国内だけでなく世界の音楽教育の発展に多大な貢献をしてきた，ということもよく知っております。

韓国の音楽教育に関して言いますと，これまでは（日本がそうであったように）欧米の音楽教育の影響を強く受けてきました。この影響は単に教材曲とか楽器というだけでなく，音楽の理論や指導法にまでおよんでいます。しかし，韓国の音楽教育はこの 20 年の間に大きな変化をいたしました。つまり，西洋音楽から韓国伝統音楽中心の音楽教育へと大きな方向転換をしたのです。聞くところによりますと，日本でも伝統音楽をもっと教えようという傾向が潮流になりつつあるとか。西洋音楽がグローバル化してゆく中で自国の文化，音楽を教えることはいろいろ難しい問題を抱えていますが，この点で日本と韓国は共通の課題，目標をもっていることになります。その意味で私たちは，共同してゆかなければなりません。共同することで，お互いの音楽文化を相互に発展させてゆくことができるでしょう。

昨年 1 月には，坪能会長，村尾前会長に韓国を訪問していただきました。その時の会合で，日韓両国の学会がよりいっそうの学術交流，緊密な情報交換をすることを話し合いました。韓国音楽教育学会の会長といたしまして，こうした積極的な交流関係を発展させてゆくことを，ここに確約いたしたいと思います。

最後になりましたが，村尾前会長にはマレーシア ISME 大会で再会し，その時，ニュースレターに挨拶文を寄稿してくださるようお願いされました。ここに改めてお礼申し上げます。

# ２．報告とお知らせ

## ２−１　平成 18 年度　第２回常任理事会・理事会報告

日時：平成 18 年 7 月 2 日（日）14：00〜17：00
会場：日本女子大学新泉山館 503 室
出席：今川，岩井，奥，加藤，小山，阪井，佐野，島崎，坪能，村尾，大沼（参事）
欠席：岩崎，降矢

【報告事項】

１．会務報告等（小山）

・ 5 月 15 日以降の会務報告がなされた。

6 月 18 日　音楽教育学 36-1 念校(事務局)
6 月 20 日　大会発表申し込み締切
6 月 30 日　音楽教育学 36-1・ニュースレターNo．24 発送
ワークショップ申し込み締切
7 月 2 日　第 2 回常任理事会　(日本女子大学)

・ 事務局のアルバイト柴崎かがりさんが留学のため，6 月より永岡和香子さんに引き継がれた。

２．各委員会報告

（1） 編集委員会（岩井）

ジャーナル Vol.4 No.1 の編集が終了した。次回委員会は 7 月 30 日。

（2） 音楽文献目録委員会（斉藤博委員から坪能会長へ報告）

・ 6 月 3 日　武蔵野音楽大学にて委員会開催。本学会より，本多佐保美・山下薫子・斉藤博委員が出席した。業務は，文献の選定。

・ 『音楽文献目録』34 号を発行予定。次回委員会は 7 月 22 日。

（3） 国際交流委員会（奥）

メール会議に加えて，5 月 28 日に開かれた教大協全国大会を機に委員会を開催した。海外向けニュースの内容と手順について，ISME グループ旅行の進捗状況について報告があった。

（4） 40 周年記念論文集準備委員会（今川・佐野）→協議事項へ

（5） 企画・ワークショップ（島崎）

ワークショップの申し込みは，52 名の応募があり，申し込みを締め切った。

３．第 37 回千葉大会（宮野実行委員長から小山事務局長へ報告）

大会参加費の打ち合わせを行った。

事前振込み：￥4,000，当日納入：￥4,500，懇親会：￥5,000
臨時会員は，1 日参加￥3,000，両日参加￥5,000，
学生会員（学部学生）は，1 日参加￥2,000，両日参加￥3,000，とする。

４．第 38 回岐阜大会（松永洋介実行委員会事務局長→坪能会長に報告）

岐阜大会の実行委員長が，朝田健氏（岐阜大学）に決まった。

【協議事項】

1．第 37 回千葉大会時間割について（島崎・阪井）

大会日程案がＡ・Ｂの２案提出され，Ｂ案に決定した。（大会プログラム参照）

2．会則改訂について（村尾・坪能）

前回理事会（5 月 14 日）に提出された会則改定案の一部文言について検討した。8 月末までに，会則改訂委員会が常任理事会に最終案を示し，メール稟議の上，次回委員会および総会に提出予定である。

3．40 周年記念事業

（1）40 周年記念誌（岩崎）→岩崎理事欠席により，次回理事会での協議とする。

（2）40 周年記念論文集（準備委員会：今川・佐野）

・出版計画の概要について準備委員会より説明があり，以下のとおり承認された。

音楽之友社より 1 巻本として出版。内容は，各領域 2 本程度，学校教育領域は 6 本程度の論文，および編集委員によるディケイド・レヴュー，学会プロジェクト研究のレヴューとする。

・準備委員会案による編集委員候補から，以下の 8 人が編集委員として選任された。

今川恭子（乳幼児），小川容子（知覚・認知），阪井恵（学校教育），佐野靖（学校教育），杉江淑子（社会教育・生涯教育），南曜子（障害児・療法），安田寛（歴史）

10 月総会での提案，承認を経て，編集委員会の発足となる。発足後，委員の互選により，委員長および副委員長を決定する。

（3）学会賞について（坪能）

学会賞を設けることが提案され，その目的，対象範囲，選考方法，賞金額などについて協議が行われたが，継続審議となった。

4．第 9 回音楽教育ゼミナール（日韓共同開催）について（坪能）

（1）日程

2008 年 1 月中旬の開催をめざすことが確認された。日程，会場（日本女子大学が候補）を早期に決定し，今年中に準備を開始することになった。

（2）二国間交流事業申請

日本学術振興会の募集する「二国間交流事業」に申請することとなった。

5．交流論文の推薦方法について（加藤）

日本から推薦する論文の選定方法について，学会誌検討委員会で検討することとなった。

6．2007 年度岐阜大会プロジェクト研究について（坪能）

・今年度のプロジェクト研究２となる「日本音楽をどう捉えたらいいのか」は，来年度も継続とすることが承認された。

・もう 1 つのプロジェクト研究について案が出されたが継続審議となり，各常任理事は 8 月末までに，会長宛に案を提出することとなった。

7．大会研究発表の資格・手続きについて（小山）

・来年度より，応募要領を変更することが承認された。変更の内容は以下の通り。

5 月末までに入会申し込みと会費納入の手続きを終えた新入会員には，当該年度大会におけ

る研究発表の資格を認める。

・大会プログラムのプロシーディング方式化が話題となったが，それに伴い考慮すべき点が多岐に亘るため，継続審議となった。

８．入退会者承認

・5 月 14 日以降，新規入会申込者が 25 名あり，承認された。

・17 年度申出退会者のうち 1 名の退会取り消しが承認された。

・平成 18 年 6 月 30 日現在　正会員数 1559 名。

新入会員(平成 18 年 5 月 14 日以降)

| 会員番号 | 氏名 | 所属組織名称 |
|---|---|---|
| 3343 | 高野　敦 | 兵庫教育大学大学院（岡山大学配属） |
| 3344 | 今泉　明美 | 小田原女子短期大学 |
| 3345 | 藤木　春美 | 大牟田市立手鎌小学校 |
| 3346 | 古根川　円 | 山口大学大学院 |
| 3347 | 多田羅　康恵 | 特定非営利活動法人　　音楽療法ＮＰＯムジカトゥッティ |
| 3348 | 武内　裕明 | 広島大学大学院 |
| 3349 | 原　尚志 | 福岡教育大学 |
| 3350 | 小口　浩司 | 武蔵高等学校・中学校 |
| 3351 | 中林　美佳子 | 茨城大学大学院 |
| 3352 | 金　美成 | 千葉大学 |
| 3353 | 豊田　耕三 | 東京藝術大学大学院 |
| 3354 | 田中　克己 | 東京家政大学・尚美学園大学 |
| 3355 | 小曳　加奈子 | 広島大学大学院教育学研究科 |
| 3356 | 原田　奈美 | 山口大学大学院 |
| 3357 | 高木　洋平 | 愛知教育大学大学院 |
| 3358 | 桐山　佳子 | 愛知教育大学大学院 |
| 3359 | 佐藤　丹玲 | 東京女子体育短期大学 |
| 3360 | 柴田　千尋 | 国立音楽大学 |
| 3361 | 藤井　美沙 | 東京音楽大学 |
| 3362 | 金　永連 | 新羅大学校師範大学 |
| 3363 | 鈴木　幸江 | 東京学芸大学大学院 |
| 3364 | 間瀬　三奈 | 愛知教育大学 |
| 3365 | 三浦　香澄 | 山口大学大学院 |
| 3366 | 岩井聡子 | 旭市立第二中学校 |
| 3367 | 羽石　彩子 | ㈱伊藤楽器 |

９．次回委員会：平成 18 年 10 月 27 日（金）14：00～　　千葉大学

## 2－2　平成 18 年度第 2 回編集委員会報告

学会誌編集委員会　委員長　木村次宏

平成 18 年 7 月 30 日(日)，埼玉大学東京ステーション・カレッジにおいて，今年度第２回目の委員会が開催され，下記の議題等について検討された。

１．再投稿原稿の査読結果・状況等について（「音楽教育学」１件〈あと２件査読中〉，「音楽教育実践ジャーナル」２件)
２．投稿原稿の査読状況・結果等について（「音楽教育学」２件〈あと２件査読中〉）
３．新たな投稿原稿の担当者の決定等について（「音楽教育実践ジャーナル」１件）
４．音楽教育実践ジャーナル
　・通巻７号の進捗状況について
　・通巻８号の編集計画について
　・通巻９号の担当者及び特集内容について
５．音楽教育学(36-2)の編集担当者及び内容の確認について
６．学会誌検討委員会答申について
７．その他

## 『音楽教育実践　ジャーナル』Vol.4 no.2 (通巻８号)特集・原稿募集

『音楽教育実践ジャーナル』通巻 8 号（2007 年 3 月発行）の特集に向け，下記の要領で原稿を募集いたします。

**********

現代に生きる子どもの日常生活では，まったくの静寂の中で，自然界の音だけに身をおくことは，非日常的であり稀なことになってきました。音楽に限らず，意識的・無意識的にたえずさまざまな音波によって生じる「音」を耳にして過しているといっても過言ではないでしょう。

では，子どもはこうした音をどのように感じているのでしょうか。

私たちは音をきくとき，「心地よい」ものとして感じたり，あるいは不快なものとして捉え，程度は違うものの「感情」にそって受けとめています。音響学の分野では，「音」に対する心理的影響について，多くの測定と様々な議論の中から「快－不快」を基本方向とした軸（次元）が提唱され，騒音についての心理的影響などでも活用されてきました。とりわけ騒音については，

その音に対する個人差（音に対する敏感性）が示されてきました。また，「音環境が存在するその場を越えた絶対的快適音環境はない」（難波 1990）と文化差があることも示されています。

幼児教育では「音楽」という枠組みを離れ，たとえば自然の音に目を向ける保育が行われたり，地域の中で子どもが「音」と関わる姿を保育活動に取り入れたりなど，子どもを取り巻くひとつの環境として「音」を捉えた教育活動や教育実践がなされてきています。

また一方，園舎や校舎の設計プランが近年既存のスタイルから大きく変わり，「オープンプラン」が取り入れられたものが見られるようになってきました。このことは，教育活動や保育のスタイルを自由にし，一定の成果をもたらしているものの，音の面からは騒音環境になっているという問題点も指摘されています。

そこで，今回の特集は，1）現在の子どもがおかれている音環境の実状を知る，また，2）学校園で音環境と音楽に関わった取り組みの実例を知ることでこれからの子どもの音楽教育のありかたを考えるものとしたいと思います。

なお，ここでいう「音環境」は，子どもたちが育っていく中で，日常の子どもを取り巻いている状況すべての，広義のものを指します（ただし，私的な学習やお稽古などを含まないこととします）。

学校教育場面だけに限定しないことで，広く音に関わった「環境」教育や「音楽的取り組み」について原稿を募集します。会員の皆様の投稿をお待ちしています。

●特集タイトル：「子どもと音環境」
●投稿原稿締切：2006 年 10 月末日必着
投稿の際には，特集への募集原稿であることを必ず明記してください。
（編集の都合上，締切の時期が早くなっていますのでご注意ください。）
●その他：書式，字数等は『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定をご参照ください。採択された原稿については，編集委員会から 11 月末日までに投稿者に連絡いたします。

編集委員長　木村次宏

## ２－３　音楽文献目録委員会より新刊のお知らせ

音楽文献目録委員会
斎藤　博，本多佐保美，山下薫子

### 『音楽文献目録 34』（2006 年版）

『音楽文献目録 34』が本年 10 月に発行されます。この目録は，2005 年 7 月から 2006 年 6 月までに公表された日本音楽およびヨーロッパをはじめとする諸外国の音楽など，音楽全般に関わる著書，大学紀要，雑誌論文等を網羅的に収録したもので，音楽はもとより，文学，史学，教育学，宗教学，社会学など広い分野にわたる基礎文献が，約 1,300 項目収録される予定です。

定期購読料（年 1 回発行）：
3,500 円（税込）
発送料：
1 冊につき 330 円
（包装手数料込）

（定期購読を一度お申し込みいただければ，
毎年継続してお送りいたします。）

### 既刊『音楽文献目録索引 1－20』

『音楽文献目録』1 号(1973)から 20 号(1993)までの索引が，1 冊にまとめて刊行されております。この索引は，この 20 年間の日本における音楽研究の歩みを具体的に示す基礎資料である『音楽文献目録 1－20』（復刻版・合本全 4 冊）の別冊として出版されたもので，研究者，研究室，図書館に必須の基本図書です。

定　価：8,150 円（税込）
発送料：1 冊につき 450 円
（包装手数料込）

ご希望の際は，下記までお申し込みください。

音楽文献目録委員会
事務局（編集・発行）
〒176-0003　東京都練馬区羽沢 1－13－1
武蔵野音楽大学内
Tel＆Fax　03－3991－3018
E-mail　office@rilm.jp

## ３．大会のご案内

## ― 第 37 回全国（千葉）大会のご案内 ―

2006 年 10 月 28 日（土）～29 日（日）

音楽教育の将来を担うのはあなたです！多くの方のお越しをお待ちしています。

大会実行委員会　委員長　宮野モモ子

### １．　基調講演とシンポジウム

今大会はわが国の教育改革，とりわけ学校教育としては大学にまでつながる意図的人間形成の一連の継続機関の教育実現への正念場に当たる時期の開催となりました。

こうした時期に関東地区においての開催が，皆様の研究にとってより有意義な大会となるよう，大会プログラムに工夫をさせていただくよう準備を整えてきました。そしてこのような主旨で，基調講演およびシンポジウムを行わせていただくこととなりました。

さまざまな立場で学校音楽科教育の研究に携わっておられる，ご参会の方々とともに，まさしく今進められているホットなニュースを肌で感じていただくとともに，今後確実に私たちの眼前に繰り広げられることになる，新しい音楽科教育への方向性をいち早くキャッチし，子どもたちの音楽的成長を支える手だてを探っていくことに役立てばとの企画です。

この意味から，基調講演では講演者に文部科学省初等中等教育局長の銭谷眞美氏にお願いいたしました。まさしく教育改革の渦中の方です。日本音楽教育学会への熱い思いで，ご講演のご快諾をいただいたところです。教育改革の中からどのような音楽科としてのお話が飛び出すか楽しみにいたしたいと思います。

次にシンポジウムによって，話題を広げ深まっていくよう準備中です。パネリストには，大学長として無藤隆氏，全国学校教育小学校長会長であった西村佐二氏，音楽教育学会の元会長の山本文茂氏と学会のもう一人の代表として私学の立場から阪井恵氏にお願いをすることになっています。４氏それぞれのお立場から，高所局所から学校教育で育てるべき学力について話題をいただき，音楽科教育で実現できる学力について，さらに研究課題にまで踏み込み，子どもたちのための音楽科教育の将来について語っていただけると思います。大きな期待をもって参会者とともに考える時間にしたいと思います。ここでのキーマンはコーディネーターの金本正武氏です。厳しい状況の中にも，きっと多くの夢と希望をもたらせて下さるものとなるよう，これから準備をしてまいります。

28 日　　13：30～16：20　視聴覚室

《基調講演》

テーマ「教育改革の現状と音楽科教育への期待」（予定）

講演者：銭谷眞美（文部科学省初等中等教育局長）

《シンポジウム》

テーマ「学校教育と学力

～いま音楽科教育研究は何をすべきか～」

パネリスト：無藤　隆（白梅学園大学・短期大学長）

山本文茂（東京藝術大学名誉教授）

西村佐二（聖徳大学教授）

阪井　恵（明星大学人文学部助教授）

コーディネーター：金本正武（千葉大学教育学部教授）

### ２．研究発表

詳細は同封の大会プログラムをごらんください。個人研究発表は 72 件の申し込みがありました。理事会企画のプロジェクト研究は，昨年

に引き続き，「学力論争と音楽教育（2）---音楽科における<ゆとりの教育＞は子供たちに何をもたらしたのか」，新企画プロジェクトには「日本音楽をどのように捉えたらいいのか」が行われます。また，共同企画では，「異文化理解を踏まえた多文化音楽教育の教育方法の提案と検証Ⅲ―心の教育としての多文化音楽教育小学校・養護学校から大学教育まで」（企画：降矢美彌子）を予定しています。

### ３．院生フォーラムで交流を

今大会でも引き続き「院生フォーラム」を開催いたします。全国の院生を中心とした若手研究者のみなさんが集い，研究を交流する場です。千葉大会の「院生フォーラム」では「ポスター発表」を企画しています。研究成果発表もよいと思いますが，むしろ中間報告を公開しあうことに，フォーラムのメリットがあると考えていますので，修士論文の中間報告の内容でも結構です。自分の研究を発信することで，さまざまな示唆や情報を得ることができます。気軽に参加してみてください。修士修了生でも歓迎です。「院生フォーラム」が若手の研究交流の場となることを願っています。

| | |
|---|---|
| **日時** | 10月29日（日）　am11：30～12：30 |
| **場所** | 2203教室 |
| **申込先** | 電子メールでお申込み下さい。<br>gonbe@deluxe.ocn.ne.jp　（戸谷　登貴子） |
| ※申込みの際は，氏名，所属，学年，連絡先，発表題目をご連絡ください。 | |
| **締切** | 9月30日（土）　追って詳細は連絡いたします。 |
| **担当者** | 千葉大学大学院修士課程　音楽教育専攻1年<br>戸谷　登貴子 |

### ４．昼食および懇親会は生協食堂で

土・日ですが両日とも大学内の生協食堂を営業していただきました。昼食などに是非ご利用ください。また，10月28日（土）午後6時15分より，生協食堂において懇親会を開催いたします。懇親会費は5000円です。大会参加費とともに，同封の郵便振込み用紙にて事前にお申込みをお願いします。

### ５．交通は公共の交通機関利用を

キャンパス内への車の乗り入れはできません。すみませんが公共交通機関をお使いください。

千葉大学大会実行委員一同，多くの方々とお会いできますのを楽しみに準備を進めさせていただきたいと存じます。大勢のお越しを心よりお待ち申し上げます。なお，千葉大会についてのお問合せなどは，大会実行委員会事務局（下記）までお願い致します。

〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学教育学部音楽科 大会実行委員会
事務局長　本多佐保美
TEL/FAX　043-290-2686
honda@faculty.chiba-u.jp

### ６．学会事務局よりお知らせ

（1）大会参加費について

大会参加費および懇親会費は，同封の振込み用紙にて10月14日（土）までにお振込みください。払込み済み票（明細票）は，振込みの証明となりますので，各自保管され，大会当日受付にご提示ください。

第37回大会参加費

| | |
|---|---|
| 前払い（振込み） | 4,000円 |
| 当日受付支払い | 4,500円 |
| 懇親会費 | 5,000円 |

（2）参加申込みハガキについて

欠席の場合は総会の委任状をお忘れなく記入してください。

（3）年度会費について

年度会費が未納の方は，大会受付に事務局窓口を設けますのでご利用ください

## 4．海外トピックス
## ISME 第 27 回マレーシア大会

奥　忍（岡山大学）

第 27 回 ISME 世界大会のテーマは「Sentuhan」(文化や民族の違いを越えた融合)。マレーシアの首都クアラルンプールの７月 16 日～21 日は，90 数カ国から，1400 人を超える音楽関係者が集まり，研究発表，演奏会，ワークショップなどで交流し合い，切磋琢磨し合った。まさにテーマを地で行く１週間だった。

会場のコンベンションセンターは大小さまざまな部屋を多数取り揃えた巨大な施設である。また，マレーシアの人々は，国際会議につきものの混乱に対して一つずつ誠実に対応され，すばらしく心地よい大会となった。

日本からの演奏団体は福島コダーイ合唱団，天理大学雅楽部，「三戸・佐藤デュオ」の３団体，研究発表は，留学している人たちの国名表記と絡まって正確に数えることができない。いずれにせよ，そのくらい多く，毎時間どこかで 誰かの発表が行われているという状態であった。以下に参加された学会員による原稿と写真を掲載する。また，総会では新 ISME 名誉会長に高萩保治氏が推挙され、総立ちの拍手をもって承認された。

なお，次回はイタリア。中世からの歴史を誇るボローニャ大学を中心として開催が予定されている。

華麗な動きと装束で観客を圧倒した天理大学雅楽部の「太平楽」

アジア諸国の音楽教科書と教材教具展

## ISME での演奏　“Sannohe & Sato Duo”

三戸(さんのへ)　誠（国立音楽大学）

2006 ISME Malaysia にヴィオラとピアノの二重奏「三戸誠・国立音楽大学(Viola)　&佐藤由里亜・田園調布学園中等部高等部（Piano）」で出演した。7 月 18 日，マレーシア唯一のクラシック専用ホール 800 席の音響の素晴らしい Petronas Philharmonic Hall において，17 時からピアノ選び，ステージの立ち位置など，いつも質の高いクラシックのコンサートを手がけているスタッフに支えられ，素晴らしいステージリハーサルを体験することが出来た。18 時からコンサートが始まり，前半は Menore Malaysia UCSI のマレーシア古

典舞踊が上演された。 後半が私たちの Duo, 聴衆があたたかい拍手で迎えてくれた。山上進氏の「縄文」，田中利光氏の「母が歌って教えてくれたこもりうた」，Piazzolla の「Tanguano」と「Le Grand Tango」をのびやかに演奏することが出来た。

19 日は UCSI で催された “International Concert Series = In Celebration Of ISME 2006 Sentuhan Music Festival” に出演した。Bentury Music でリハーサルをした後に会場に移動，16 時 30 分からステージリハーサルを開始した。ホールは 300 席，通路と客席の床は厚手のカーペットで覆われ，響きのないホールだった。私は学生スタッフに生の音で聴いてもらいたい希望を告げ，彼らとともにそのための準備を開始した。ピアノの位置や蓋の開け具合，ヴィオラ奏者の立ち位置など，このホールと舞台ではどうしたら一番良く響くのか。約 1 時間半をかけてステージづくりが出来たことは，大きなワークショップを行ったような充実感があった。20 時 30 分，私たちの Duo でコンサートが始まった。Schumann の Märchenbilder，Britten の Lachrymae，Piazzolla の Revolucionario を演奏した。どの曲も聴衆に喜んで受け入れてもらえた。 次に Miss Lebed 氏のピアノ独奏，UCSI 先生方の Piano Duo，Anatolian Sun Quartet と続いた。UCSI の Prof. Lou 氏の提案で，コンサートの最後にトルコの Anatolian Sun Quartet と私たちがコラボレーションすることになった。彼らは民俗楽器 Baglama・ヴァイオリン・ピアノ・打楽器と言う編成で，民俗音楽のエキスをアピールしているグループである。佐藤氏と私が登壇，ヴァイオリンの Dr. Alpagut 氏の合図で Mr. Kahraman 氏と佐藤氏の連弾がイエメンのメロディをスタートした。5 拍のエキゾチックな音楽に，私は flageolet，sul ponticello, col legno，glissando などの技法を多用しながら即興で演奏を展開した。このアジアの東西の端から集った演奏者によるコラボレーションは見事に成功し，聴衆から喝采を浴びた。なお，後日，このコラボレーションはトルコのデイリー・ニュースに記事として掲載されたと，Dr. Alpagut 氏から連絡があった。

この大会に参加して音楽を通して多くの仲間が増えた。そして，いろいろな文化としての音楽が出会い，それぞれの確立と融合につながる手立てになって行くことを願っている。

私たちをこの大会に誘ってくれた Dr. Chan 氏，案内&通訳係の Dr. Zulkefeli 氏をはじめ，お世話になった各位に感謝申し上げたい。

## Panel Discussion: “Critical Issues in School Music Education of Asian Countries”

田中 健次（茨城大学)

Panel Discussion ：“Critical Issues in School Music Education of Asian Countries” は，7 月 19 日の 10:00～11:30 に開催された。この企画は，2003 年名古屋で開催された日本音楽教育学会プロジェクト研究 B「アジア諸国の音楽教育制度に関する研究」 から引き継がれたものである＊。2003 年のパネリストでもあったチャン氏（Dr. Chan Choeng Jan，University Putra Malaysia）と田中の立案によるもので，パ

ネリストにタイ，マレーシア，台湾，フィリピンと日本の奥忍氏を迎えて実施された（当初予定していた日本のパネリストが怪我のため参加できず，類似の立案によってヤマハ株式会社より助成金を受けていた奥忍氏が本企画に合流した）。なお，この企画の実務を実質的に担当したのはチャン氏であり，本企画に連携する「教科書展」については奥とチャン両氏による尽力が大きいことを付記しておきたい。

このパネルディスカッションでは，2003年と同様に課題をそれぞれの国における①音楽教育の問題点，②音楽教師の育成，③音楽教師がかかえる問題，④西洋音楽と伝統音楽の扱いに絞った。しかし 90 分という短い時間では消化不良となったことは否めない。もちろんそのことを予測して各国の基本情報が対比できる配布資料を準備していたのだが，それでもフロアとの十分な討議の時間をとることができなかった。

2003 年に同企画が国内で提案されたとき，ある方から，同種の企画がすでに 90 年代に行われているので無意味だという指摘があった。しかし，一度行われたから無意味という批判は妥当ではない。このような問題は一過性で終わるべきではなく，定期性のある定点調査が必要であり，時系列的なデータを示すことによって明らかになってくるものもある。各国の音楽教育に関する基本情報を収集したり，時系列的に教科書を収集したりすることは，将来の音楽教育の研究にも貢献することになるだろう。これらに本企画の意味がある。

なお，ヤマハ株式会社の助成によって収集した教科書は公共性の高い国立音楽大学附属図書館に寄贈するとともに，あわせて報告書を作成する。

＊日本音楽教育学会：2003『音楽教育学』Vol. 32, No3

## ＩＳＭＥ–コミッションレポート・コミュニティー音楽活動部会

滝沢　達子 (愛知教育大学)

ISME の本大会の近隣諸国で開催される７つのコミッション・セミナーの一つであるコミュニティー音楽活動・通称 CMA の研究部会が，本大会のマレーシアの隣国，シンガポールの Nanyang Technological University (NTU)の教育学部・ビジュアル・パフォーミング芸術科のシルビア・チョン博士のご尽力により，その音楽教育教室を会場に７月 12 日から３日間，第 12 回 CMA セミナーが開催された。CMA の過去・現在・未来の大テーマの下，14 の発表と CMA の古くて新しいパラダイム—文化の学習とその伝授に焦点をあてたシンポジウム(インドネシアのガムラン学習の原風景とカナダの学校でのその応用授業，前回のスペイン・カナリー諸島における伝統音楽の学習，カナダにおける CMA のシニアの取り組み)が企画され，また CMA の多様な様相とその意味する活動内容について "Conflict and Policy" と題して，発表参加者によるグループ討議がなされた。

セミナー規模は，論文発表者のほか前回のスペイン・CMA から続いて参加された方や，

私を含めたコミッショナー５名及びシンガポール人など，約 25 名と小規模ながら，それだけに見知らぬもの同士のコミュニケーションをはかるべく４，５人グループによる即興活動 (例—ブラジルの楽弓・ビリンバウの音を口頭リズムで表現しながらシロフォンやタンブリンを使ってアンサンブル発表)などをまじえた親密な交流が出来た。

参加国は主催国のシンガポール，カナダ，マレーシア，イギリス，アメリカ，スペイン，オーストラリア，韓国，ブラジル，イスラエル，そして日本からは東京学芸大の塩原麻里氏が「音楽経験–自分史にみる大学生の音楽活動の考察—コミュニティー音楽活動の観点から」を発表，私は僭越ながら委員として 2000 年から関ってきて，CMA の観点に必要ながらこれまで欠落していた「音楽産業によるアウトリーチ活動とコミュニティ音楽」と題して，新しい電子楽器開発によるおじさんグループバンドのコミュニティー音楽活動（介護センター等への音楽訪問サービスの兆し等）について，発表というより CMA の一局面としての話題提供をさせて頂いた。

コミュニティの捉え方は，問題行動のあるグループを対象としたブラスバンド指導の成果(ブラジル)，障害児の為のグループ音楽療法(アメリカ)，シニアグループによるバンド活動(アメリカ)，ビラロボス音楽財団によるコミュニティ・グループ音楽活動支援組織(ブラジル)など各国各様にあり，互いの情報交換の場となった。

尚今回の企画には主催のＮＴＵの後援及びシンガポール芸術基金(ユース・オーケストラ演奏鑑賞)，更にヤマハ株式会社からのご助成を頂いた。次回のＣＭＡは英国・リバプール市，ビートルズの本拠地で開催の予定。

## The 13th International Seminar of the Commission on Music in Cultural, Educational, and Mass Media Policies in Music Education (CMCEMMP), ISME Report

今田匡彦（弘前大学）

このコミッションの中心は，実は，＜Policy＞である。時々，＜マス・メディア・コミッション＞と呼ばれたりするが，これはあまりよろしくない，ということのようだ。7 月 12 日から 15 日，Hong Kong International Institute of Music での開催となった今回は，南アフリカ，香港，台湾，中華人民共和国，日本，オーストラリア，カナダから，計 15 本の研究論文が発表された。

研究とは，結局，操る＜ことば＞の問題なので，ことばを使って，如何にそれ以前の混沌に楔を打ち込み，形式化するか，に掛かっていて，どのように巧妙に数字を扱おうが，その本質は恐らく変わったりはしない。命名されるべき対象は，当然，ことばの前に在る，ので，対象そのものは，実は，常に無傷だったりもする。真っ暗な洞窟に，わざわざ壁画など描く必要もないだろうに，アルタミラ壁画は闇の中である。洞窟内部の残響時間の長さを考えれば，視覚的に残された牛よりも，その場で執り行われていた儀式の方が遥かに重要で，つまり，＜オンガク＞はこうして始まった，と考えてもおかしくはない。＜ことば＞は，その後から，遅れてついてくる，というわ

けだ。その後，ことばの効率性は，混沌に＜価値＞を与えるに至る。洞窟で，ただただ鳴っていたはずの＜オンガク＞も，ことばの悪戯により，＜音楽＞＜文化＞＜教育＞＜マス・ メディア＞＜政策＞などなど，様々な視点を宛がわれることになった。このコミッションが，長い名前を持つ所以である。＜Policy＞とは，つまり方針なので，＜オンガク＞という混沌が，＜文化＞によってどのように＜音楽＞として成立しているかを見極め，混沌への畏敬を忘れることなく，ヒトを，どのような方向へ導くか，を検討するのが，故に，このコミッションの役割ということになる。それぞれのペーパーの出来具合は，というと，当然色々ではあったが，＜クリエイティヴィティ＞が，キーワードとして，４日間を貫いていたのが，面白い。言語化以前の＜オンガク＞への立ち会い方が，どうやら音楽教育者の，研究者としての腕前を決めるようなのだ。

尚，これまでのコミッションをチェアーとして成功に導いた Chi Cheung Leung（香港），David Forrester（オーストラリア）がコミッショナーを退 き，次回からは Neryl Jeanneret（オーストラリア）が新しいチェアーとなる。コミッショナーは，Schalk Frederiks（南アフリカ），Scott Goble（カナダ），Jiaxing Xie(中国)，Rita Yip（香港），日本から私の計６名で構成される。

## ５　国内トピックス
## 第３回夏期ワークショップ報告

7 月 22 日（土）・23 日（日），東京学芸大学で行われた 2 つのワークショップは，延べ 70 名以上の参加者がありました。参加者の声をお届けします。

### １日目：パフォーマンス・コース
### 大石哲史さんのワークショップ「自然で自由な「こえ・ことば・うた・からだの表現」の探求」を受けて

岡田加津子（京都市立芸術大学）＆　奥村正子（埼玉大学）

Ｋ：小学生の詩に作曲し，「詩が詞になるとき」というテーマで授業をするという試みを 6 年程続けています。子どもたちの自然で自由で，ある時はとっぴな言葉の数々をどのように歌えばよいのか。ワークショップのタイトルに惹かれ，また大石氏ならきっと面白いことがあるはずと思い，受講しました。

Ｍ：教職課程の学生を指導しています。「あめふりくまのこ」は保育室で子どもに歌いかける声。「ふるさと」の弾き歌いは音楽科の授業を担当する準備です。所謂クラシックの発声指導とは何が違うのか，何が共通するのかを常に模索しています。また「うたうこと」は，呼吸や身体の状況，心理面と密接に関連してい

て，気持ちよく歌える，自然に歌えるということを妨げる要因が存在することを自分自身の経験からも痛感していました。

K：大石氏の自由自在に変化する声の見事さに圧倒されました。ドイツリートの歌手になったかと思えば，次の瞬間漫才家，また愚痴を聞いてくれる友達役にもなり，まさに「声の職人」とでも言いましょうか。

M：一人一人の問題を瞬時に見抜き，受講者の身体の状況や表情を変えてゆく。詩の心に受講者が寄り添うように導いてゆく。そのことで発声や発音が変わってゆく様子は劇的でしたね。「声のコントロールは全てお腹で」と指導されるが，「横隔膜」「軟口蓋」などの言葉を使われなかったことは印象的でした。

K：「歌う前に息を吸わないで。」「自分の低い声域を大いに使おう。」とも。

M：地声の扱いは，発声指導において重要課題であると思いますが，大石氏は受講者の「話し声」を出発点として，「歌声」を，高い音域の頭声発声まで，実に巧みに引き出されていましたね。

大石氏の指導を受けて，本当に楽しかった。自分自身の「うたうこと」の可能性も広がったように思います。有難うございました。

## 2日目：授業づくり・コース

### 熊木眞見子さんのワークショップ「音・遊び・動き」体験記

味府　美香（日本女子大）＆　駒　久美子（同大学院生）

ワークショップ大好きな私たち。私たちはなぜワークショップに参加するのでしょう？　それは…楽しいから！そして，初めて出会った人とも，音楽を通してコミュニケーションできるからです。だから，いつもノリノリ♪しかも，自分自身が楽しみながら，子どもたちと楽しむ音楽アイデアも発見することができて，一粒で 2 度おいしい，グリコのキャラメルのようなものなのです。

熊木先生には，いつも楽しい，そして新しい授業を展開されているのを拝見させて頂いていますが，今回のワークショップでも，楽しい活動が盛りだくさんでした。例えば，「リズムカードであそぶ」活動では，一人 3 枚，手・足の絵のついたカードと，白紙のカード 1 枚計 4 枚を使って，二人組となり，8 枚のカードを自由に組み合わせて，リズムパターンをつくりました。二人組のなかには，カードを横向きにして表現を変えたものもあり，参加者の中から，「こんなこともできるんだー」との声。ますます触発されて，自分たちのリズムパターンを再考するきっかけともなりました。また，8 人グループで，それぞれが 2 枚ずつカードを出し合い，16 枚のカードを組み合わせてリズムパターンをつくるときには，各グループ様々な意見交換がなされ，休符をラインダンスのように表現したり，円になってお手合わせの要素を取り入れたり，2 段にカードを並べて 2 声部のカノンにしたりもしていました。そうしているうちに，音色や強弱，速さにもこだわって，面白いリズムパターンができあがりました。そして，他のリズムパターンをお互いに演奏したり，聴き合うことによって，お互い

のよさを認め合うこともできました。このような活動を通して，参加者は音楽をつくった満足感が得られたことと思います。

だから，まだワークショップに参加したことのない皆さん！何も心配はいりません。参加者同士で楽しむことが，明日の授業につながるのですから！

## 6　事務局からのお知らせ

### 「日本音楽教育学会ホームページ」をご利用ください！

事務局では，より早く確実な情報を会員の皆様にお伝えすることができるように，ホームページを充実させ，その具体的な活用方法を検討しています。一例ですが，諸手続きの電子化を図るため，今年度は「音楽教育関係文献リスト」の申請用紙をホームページからダウンロードし，電子メールで添付ファイルとして提出できるようにしました。今後も諸手続きの電子化を推進していく予定です。

予算の関係で，ホームページ制作専門業者に委託することができず，事務局でホームページを制作しています。レイアウトなどで不十分な箇所もあろうかと思いますが，会員の皆様からご指摘いただきながら，手づくりのホームページの良さを出せるようにしていきたいと思います。「地区例会」開催の情報など，「ニュースレター」では掲載できない最新情報もアップしていますので，定期的にホームページをご確認いただくようお願いいたします。

齊藤忠彦（事務局長補佐・ＨＰ作成担当）

「日本音楽教育学会ホームページ」　http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/

### 事務局からのお願い・お知らせ

・住所やご所属などに変更のある方は，早めに事務局へお知らせください。
・会費未納のある方は，至急納入してください。
・９月より，事務局業務時間が変更となります。
　業務時間　　月・水・金　１０：００～１６：００
　事務局スタッフ　中村幸子・岩渕育子・永岡和香子・山本華子
・ニュースレター24 号でお知らせしましたように，参事制度が発足しました。理事会記録作成，大会プログラム原稿作成，ワークショップ運営，ニュースレター校正など，参事さんの活躍が始まっています。
　参事　大石あゆ美・大沼覚子・駒久美子・夏目佳子・藤波ゆかり・裹珉卿・間瀬美奈

## 編集後記

まずもって，お忙しいなか原稿をお書きいただいた先生方に深く感謝申し上げます。各執筆者が分量をコンパクトに抑えていただいたおかげで，目標の 18 頁以内をクリアすることができました。重ねてお礼申し上げます。分量は減りましたが，各執筆者の創意工夫で簡潔な構成やポイントの明確化が図られ，さらに，トピックス等では臨場感あふれる書きぶりがなされ，内容的には充実したものになっていると思います。

ところで，すでにご存知の方も多いとは思いますが，東京都立学校において平成 19 年度から学校設定教科・科目「日本の伝統・文化」がスタートします。東京藝大では音楽教育と美術教育が中心となってそのカリキュラム開発を行い（17 年度），今夏はその副教材づくりと実証授業の準備に追われています。「江戸・東京を歩く」「道具と工具」「身の回りの情報・メディア」「儀式における音・音楽」など約 30 の単元が提案されています。この作業を通じてさまざまな分野の人たちと交流することになりましたが，それは代え難い貴重な経験となりました。本学会も，海外の音楽教育にかかわる学会，研究会等との活発な交流を通して多くの成果をあげています。また，個々の会員はそれぞれ他分野の方々と深く研究的な交流を進めています。これからは，学会全体としても，他教科・他分野の学会との連携・交流を活性化する工夫が大切となるように思われます。　（佐野　靖）

「カンカン，カンナの花咲けば，赤いカンナの花咲けば」

私が小中学校の頃に観た映画の主題歌で，主演は「松島とも子」であったような気がします。戦争孤児の少女が本当の母親を探してゆく物語です。今でもカンナを見かけると必ずと言ってよいほど，この映画の歌を口ずさんでしまいます。ところが歌いだしても途中で歌詞がわからなくなってしまうのです。どなたか，この「カンナの歌」をご存知の方いませんでしょうか。　（村尾忠廣）

【日本音楽教育学会役員（2005-2007年度）】
会長：坪能由紀子　副会長：岩﨑洋一・加藤富美子
常任理事：小山真紀（事務局長），佐野　靖・村尾忠廣（総務）
阪井　恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥　忍（会計）
岩井正浩（編集委員）
理事：寺田貴雄（北海道），宮野モモ子・井口　太・熊木眞美子・山本文茂（関東）
篠原秀夫・中山裕一郎（北陸），南　曜子（東海）
安田　寛・嶋田由美・若尾　裕（近畿），小川容子（中国），田邊　隆（四国）
木村次宏（九州）
【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイツシーダ1-102
【私　書　箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26
Tel/Fax：042-381-3562　e-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html